



中越家のしだれ桜（於 仁淀川町）

新しいこと、はじめよう。
春。

飛鳥出版室は
「本づくりの集い」をはじめます。

本づくりのサポーターとして、本づくりのきっかけとなる窓口を設け、共にかたちにする場を育てます。

「土佐の口福・豊かな食」発刊によせて …松田雅子	2
おのころじま奮染記 8 ……………田島征彦	4
【新連載】新聞余話① ……………大澤重人	5
いろいろかいろう 大 ……………安藝眞一	6
キルギスタンからコンニチハ ⑥ ……氏原名美	7
出版物紹介 ……………	8
本づくりの集いのご案内 ……………	10
催し物案内板 ……………	11
わが家の太郎 ⑦ ……………永野雅子	12

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援します。

「土佐の口福・豊かな食」 発刊によせて

「シズル感たっぷり」で土佐の食文化を紹介し

土佐学協会監事 松田雅子



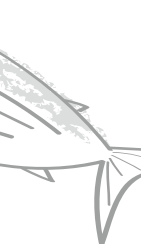
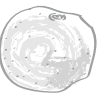
土佐学協会では、今年から「土佐の口福・豊かな食」と題し、年に一度、今まで自分達が研究してきた「土佐の郷土野菜」を含む様々な食について紹介する冊子を発行しようということになりました。

土佐学協会とは……

「総合的で俯瞰的」で、「身近で誰にでも理解され」、そして「土佐を元気にする」という、三つの柱を中心に据えた新しい学問を標榜する、土佐の地元学研究実践団体であり、平成十八年十月十五日に発会しました。以来十年、様々な活動を展開してまいりましたが、中でも「土佐の食」に関連する活動が最も多かったといえます。土佐酒、土佐のお茶、土佐の「おきやく」文化、龍馬が食べた再現食、土佐の葉草、土佐の郷土野菜、土佐の酢みかん文化、土佐の幻の在来野菜（潮江菜）……等々、話題にもなり、現在も継続中の活動が最も多いのが、「土佐の食」関連の活動なのです。

それもそのはずで、土佐の高知は日本一の食材の宝庫なのです。高知県は日本の南部、四国の太平洋側を占めていますが、沿岸まで森林が広がっているため、森林面積比率は八十四%で、実は日本一の森林県です。また、降雨量も晴天

日数も全国トップクラスであり、日本一水のきれいな川と言われる仁淀川や、日本最後の清流として有名な四万十川など、大変清流が豊富です。日本一の清流県であるといえるでしょう。さらに、長い海岸線を持ち、黒潮が日本列島で最初に接岸する地でもあります。宿毛市沖の島の周辺海域にいたっては、様々な海流が交わることから奇跡の海域と呼ばれ、魚種の豊富さは一、〇〇〇種類以上で日本一と言われています。つまり高知県は、山・川・海の幸が日本一豊富な県であると言っても過言ではないのです。春の山の幸はイタドリ、川の幸は川エビ、海の幸はドロマ、夏の山の幸はリュウキウ、川の幸は鮎、海の幸は初鰹、秋の山の幸は酢みかん（柚子、直七など）、川の幸はツガニ、海の幸は鯖、冬の山の幸は葉ニンニク、川の幸はスジアオノリ、海の幸はウツボ……という具合に、高知県民なら誰でも比較的簡単に、他県の人は全く知らない物だらけの、これら十二種類を挙げることができるのではないでしょう。そして、そんな都道府県が他にあるのでしょうか。春夏秋冬、山川海、土佐の高知は日本一食材に恵まれた県なのです。（土佐学協会理事長、司牡丹酒造株式会社社長 竹村昭彦氏による冊子発行によせた挨拶文より）





右写真の「潮江菜のハリハリ鍋」の画像に無料アプリCOCOAR2をかざすと……
左写真のような映像を見ることができる

私どもの活動は、昨年十二月「NHK ワールド」のテレビ番組「Dining with the Chef」(<http://www.nhk.or.jp/dwc/>) にも取り上げていただき（この時は「土佐の酢みかん文化」について）、世界一四〇ヶ国で広く認知していただきました。（国内において地上波での放送はありませんでしたがビデオオンデマンドにて視聴可能でした。番組内容の詳細は <http://www.nhk.or.jp/dwc/special/10/index.html> より）ご覧ください）

平成二十七年五月二十三日に開催された土佐学協会主催「第九回 土佐学大会」及び総会では、「マキノ野菜」についての興味深い内容の研究発表がなされ、活発な意見が交換されました。

このまま議事録だけで終わってしまいうには勿体ないような内容！ 「マキノ野菜」についても、今後のPR次第では、牧野富太郎博士の生涯について朝の連続テレビ小説化を目指すことも可能ではないかと、会員同士で夢が膨らんだものです。ならば従来のように研究した内容を保存していくだけでなく、広くPRしていく部分を開発してはと、年に一度の冊子発行を提案したのでした。（第九回土佐学大会の模様は冊子でたっぷりご覧ください）

基本「食文化を伝える」本です。AR (= Augmented Reality「拡張現実」) という臨場感あふれる映像とのリンク技術で、誌面だけでは表現しきれない「シズル感」が出せるというのを、飛鳥さんにご提案いただきました。お陰でこの冊子では、宮尾登美子さんが食べたいとおっしゃっていた「潮江菜（マキノ野菜）」が、ハリハリ鍋の中、美味しそうな湯気を立てている様子まで表現することが可能となりました。

和食ブームが高まっている現在、高知の食の素晴らしさを県外、海外に紹介してくださっている様々な料理家・高知家の方々も、私どもの活動を応援してくださっております。その方々からも広く配布していただき、より説得力を増していけたらと願っております。

冊子は、ご協賛各店、土佐学協会関係イベントほかで配布いたします。是非一度手にとっていただき、シズル感たっぷりのAR動画をお楽しみください。

まつだ・まさこ

アトリエよくばり子リス主宰。土佐の文化や個人史の映像を制作発信する「思い出がかり」(<http://omoidegakari.jindo.com/>) という活動も行っている。自称「一生感動伝達人」

おのころじま 大奮染木記

ふんせんき

田島征彦

8. 高知県出身

て、両親、松山で就職していた長兄と、姉、ぼくらの六人がじんまの養子になって、今までの植田姓が田島に変わった。じんまと一緒に住んで、芳原村立芳原小学校に入学した。五年生の夏休みまで、ぼくらは村の自然の中で夏は魚を、冬は野鳥を狩って、草や木の実を食べた。それが、ぼくたちの心の栄養になって、七十年も身体の奥に溜めて生きてきた。

一九四〇年一月、ぼくと征三は大阪府堺市に生まれた。敗戦後程なく、父の故郷の高知へ移住。高知市西町にしばらくいて、吾川郡西分村へ、馬車に家財道具を積み、峠を越えて引越した。積み荷の間に放り込まれて、ぼくたちの視界は空だけ。時おり、道にはり出した大きな木の枝が緑の葉の間から赤い舌のような果実に黒い種子を吐き出しているように見えた。未だにぼくの眼の底に焼きついているほど、荷馬車の峠越えは忘れられずにいる。

西分村十田^{とうだ}のはずれの漬れかけた倉に、五人家族は住んだ。電気も水道もなかった。ぼくら兄弟は山の中に分け入って、二人きりで遊んだ。隣村の芳原に「タシマのじんま(叔父)」がい

一九五一年、高知市朝倉へ越して、土佐中、土佐高に入学。卒業後はぼくが京都、征三は東京の美術大学に入学した。それでも二人は、高知への愛着が激しく、学生時代から高知でグループ展を開いたり、県展へ出品していた。美大を卒業しても大丸で二人展、画廊で個展をして、毎年のように高知へ帰っていた。

一九七〇年代の終り頃



(三十歳代の終り) 高知市内の画廊で個展を開いていた時、高知新聞に掲載された記事が「大阪府出身の田島さんが高知で個展」となっていて、いかにも、ヨソから来た人のように思われて不満で、腹も立った。いつそのこと、高知県出身としてしまえば良いと思い、出版物や人物紹介の欄などを全部「高知県出身」に変えてしまった。征三の出版物は「大阪府生まれ」になっている。一卵性双生児が何故? もちろんぼくの方が間違いだが。

ある時期、政治家や大学教授が経歴詐称のため、地位を追われるような事件があった。軽い気持ちでも、経歴詐称には違いない。ぼくが慌てて「大阪府生まれ」と直してから、もう十年は経つ。

生まれた堺市大浜での空襲をテーマに絵本を出したことで、堺市から原画展や講演会を依頼された。『ななしのごんべさん』二〇〇三年、吉村敬子との共著・童心社)

今年はあるがたいことに、七月九日から九月四日まで堺市博物館で大きな個展を企画してもらっている。(大阪府堺市博物館 072・245・6201)

たじま・ゆきひこ(染色家・絵本作家)

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染色図案科専攻科修了。一九七八年『じこくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。最新作『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

(5) かわら版

三選を目指す各党相乗りの現職に、三十代の無所属新人が挑む市長選だった。有力団体や議員が支援し、現職の優勢は揺るがないと見られていた。支局の事前会議で、入社三年目の担当記者の銀山太郎は「最初の開票発表で当を打てます。楽勝です」と言い放った。「お前の楽勝ほど怖いもんはないだろが」。銀髪の鬼支局長が冷たい声でクギを刺した。

投票開票日。投票率が4年前の前回より15ポイント上回った。銀山は晴天のせいだと信じた。最初の開票発表は「現職二〇〇〇、新人五〇〇票」。開票所に陣取った銀山は支局に電話を入れた。「現職の当でお願いします」。少し冷めたコンビニ弁当をぱくつき始めた。

三回目の発表までは現職がリードした。しかし、大栗田の中心部の票が開くと、差が詰まり、五回目で逆転。銀山は手を震わせながら携帯電話を操作した。「次長申し訳ありません。票が逆転し……」。支局デスクを務める次長の低音ボイスが裏返った。「なんと！」

新聞余話 ①

大澤 重人



選挙報道でミスしたら

次長は腕時計を見た。本社から遠い地域に配る早版の締め切りを二十分過ぎている。すぐさま大阪本社デスクに電話した。「間違いないな。二度のミスは許されへんぞ」。その声はどう喝だった。本社デスクは紙面を編集している整理部の部長席に走り、大声で叫んだ。「輪転機止めてください」。輪転機を止めるベルが押された。「ジリジリ……」。編集局内にけたたましい緊急連絡のベルが鳴り響いた。

印刷工場では、赤色ランプが点灯し、作業員が輪転機を急停止した。一分間に約一〇〇〇部が印刷でき、印刷できた新聞からトラックに積まれ、出発する仕組みだ。

輸送部は既に三台が発売していることをつかみ、運送会社に「引き返しお願いします」。間違った選挙結果の新聞は外には出せない。整理部では、正しい結果を組み込んだ紙面に組み替え、印刷工場にデータを送った。それまでに印刷した新聞は全量廃棄。紙代やインク代がかさみ、新聞輸送が大幅



正確さが命の選挙報道

に遅れた。さらにトラックの二度走り代、間違えたページの差し替え分のはんこ代……。記事の信頼性を守るための代償は大きかった。銀山は支局に上がり、顛末書を書き始めた。判断を誤った経緯、再発しないための決意表明——など。ミスを刻み込むため、パソコン入力ではなく、直筆だ。居酒屋から呼び戻された支局長はソファで酔いつぶれている。支局長席に顛末書を置き、帰ろうとした。支局のドアを静かに開けたときだ。「鬼」を起こしてしまった。「ギンヤマあー、帰さんぞお」

長い夜が始まった。

+

以上は、架空の小説です。選挙報道には細心の注意を払います。素早く正確に当選を打つ

はもちろん、選挙期間中は原則、各候補の主張を平等に伝えます。公約を掲載する場合は、行数もそろえます。

今夏は参院選の年。一票の格差を是正するため、高知は徳島と合わせて一つの区(改選数1)になります。安倍政権は衆院選との同日選をもくろんでいるとの見方があります。取材力や得票数などを処理するシステムの態勢など、新聞社の総合力が問われる暑い夏になりそうです。

+

新聞の舞台裏などを紹介します。読者離れの進む今、新聞の魅力を再認識していただき、読み方の参考になれば幸いです。新聞について疑問や知りたいことがあれば飛鳥にお寄せください。

おおざわ・しげと
毎日新聞大津支局兼地方部エリア編集委員。高知支局に支局長、次長として計五年半勤務した。最新刊『泣くのはあした——従軍看護婦、九五歳の歩跡——で第26回高知出版学術賞特別賞受賞。



デジタル難民

安藝眞一

パソコン不能者である。

使いかたを知らないのも機器は勿論手元にはない。はるか以前に「タイプだから」とか、「似合うから…是非」とか後輩、知人から煽^{おほ}てられたが、何となく面倒で、厄介なものに手出しをする気もなく、そのままに。

別にアナログ派を氣^き取っているわけでもない。現に携帯電話は持っているし、iPodというワイヤレスのステレオフォーンは気に入って愛用中。かといってスマートフォンに買いかえるには二の足を踏む。スマートフォンを略して「スマホ」。スマートを略して「スマ」。フォーンを「ホ」に

置きかえる日本独得の略語に何とも底の浅さを感じる。この浅薄な略語は業界と利用者同士のみの隠語と思っていたが、昨今ラジオ、テレビでは堂々と普通名詞として活用されているには驚く。それでも当方には無縁である。

デジタルが嫌いなわけでもない。例えばカメラの自動焦点機能。これだけは実に有難い。密林の茂みの中とか、朝ぼらけの薄明時は、老眼の所為もあつてピント合わせに汗をかく。カメラ搭載の自動焦点ボタンを押すとピタリと緑のランプが点灯、固定化するとやたらにホッと安堵する。しかしそれ以上の事は望まない。コンピュータまでは依然として手がとどかない。インターネットというのがある。コンピュータとどう接続、機能するか全く知らないが、利用した事はある。カメラの交換レンズで市場では入手困難な機種があつて、むずかしければ俄然^{がぜん}と慥しくなり次男のインターネットに相談すると、たちどころに現出！徳用価格も納得。いわれるままに現金振込すればやがて麗々しく着荷。思いの外の新品でカメラボディにピタリと収^きまった。感服した。会ってもない人から、手にもしていない

ものが順当に送られて来た事に感服することしきりであつた。

流通に革命が起っている事はこれで熟知したが、かといつて自分がインターネットのキーボードを叩くというまでにはいたらない。

コンピュータを打たないといつても今の所の衣食住には差し支えがない。衣も食もはともかく住についてはいささかの屈託^{くつたく}はある。

それは「音声ナビ」というシステム。家の機器、FAXやら、電磁調理器やらに不具合が生じた場合、即製造元のサービスセンターに電話する。ところが「音声ナビでご案内：」となつて〇〇についてのおたずねは△△を押して下さい。〇〇の場合は△△△を、〇〇でない場合は△△△△を：ととめどなく質問疑問を分別されてカテゴリー別に指定の数字ボタンを押せという手合い。ところが、いずれのカテゴリーにも当てはまらない疑問となると、ひたすらに交換手と対話したくなるが中々に交換手と出合うダイヤルが見当たらない。その内に音声が消えかかる焦燥感。交換手へのアクセスが遠くなる不安感の内に切れる。へたり込む。聞きとれない方はあきらめて下さいというアナウンスが

入ったのかとも思う。会話不調に終り機器の不具合は置きざりとなる。早口でまくしたてるナビの音声には手の出しようもなくデジタル対応の不能者は問答無用と押し出されて扉が閉まる感覚が残つて幕切れとなる。

コンピュータの人工頭脳が囲碁のプロ棋士と対局して大勝したという。人間の頭の中の見えない差し手を見つめ見破る人工頭脳とはいかなるものか。私など出会つただけでひとたまりもあるまい。

パソコンを使うと航空券、乗車券の予約が早いという事を聞く。コンサートや芝居の切符も優先されるのか。コンピュータ予約の出来ない者はすべて後手にまわるのか：

パソコンが包含する全情報は不必要としても情報の曲り角に立つた時の判断には胸騒ぎが起る。

私のようなパソコン不具者にとつては、一体どれ程の情報の暗い闇が横たわっているのか掴みようもない話である。この広い海の如き情報の波に浮きつ沈みつ、知る事も知らされる事もなくただ、うろろと彷徨している。了



受け手から送り手へ

氏 原 名 美

うじはら・なみ

高岡郡越知町生まれ。北大でロシア語を学ぶ。2001年からキルギス在。国立ビシケク人文大学日本語日本文学科学科長。

十五年前キルギスに来た頃は、ケーブルテレビでNHKワールドの番組が視聴できた。休み時間になると学生たちは、教室に据えられた大型テレビで日本のニュースを興味津々、身を乗り出して「見て」いたものだ。授業を始めるのが忍びないほどだった。そのまま見続けて、日本事情に関する質疑応答にしまったこともある。

あの頃は、学生も教師もコンピュータはおろか携帯さえ持っていなかった。ネットは普及し始めたばかりで、学生たちはたまたま手に入ったカセットテープやビデオテープから日本のアニメやポップス情報を拾い集めていた。映像情報の主役はテレビだった。

我々日本のテレビ世代にとっても、世界はブラウン管の向こうにあるものだった。テレビのスイッチを入れれば、四角い窓からよその国が見えてくる。黙っていても国際情報の断片が届けられた。小学三年生の勤労感謝の日、日米衛星中継の実験放送でケネディ暗殺を知った。翌年は東京オリンピック。毎日競技を観戦し、大会が終わってもしばらくは、世界地図から選手の名前と国の名が聞こえてくるような気がした。

一九七〇年四月に始まったNHKの『70年代われらの世界』は、それまでの番組とは違って、世界を地球という一つの運命共同体として捉える画期的なシリーズだった。中学高校生は海外への夢を膨らませたし、小学校に上がったばかりの弟でさえ「丸い地球はだれのもの……」というテーマソングが聞こえてきたら、ちよこんとテレビの前に座ったものだ。

グローバル化とは言っても、実際には人々の自由な往来は制限され、地図にはしっかりと国境線が引かれている。だが、インターネットの情報は瞬時に国境を越え伝播し、地球の大きさは変わらないうえ、世界がどんどん小さくなった。

キルギスは、幸いなことに国家による通信制限が緩いから、携帯電話もネットも、あつという間に普及した。誰もがスマートフォンを持つようになり、WiFiでいつでもネット接続できる。十五年前が嘘のようだ。ニュースはもちろん音楽やドラマもネットで楽しむもはやテレビの出る幕はない。若者には、仕事も勉学も人間関係もソーシャル・ネットワークなしの生活は考えられない。

私など、ネット情報は受信一辺倒。配信されるドラマやニュースを見るばかり、ディスプレイをブラウン管からノートパソコンに取り替えただけ、いまだにテレビ時

代を生活しているのだが、学生たちは受け身の情報を享受するだけでは満足できなくなっている。情報を「もらおう」とするのではなく「やりとり」しようと、自分たちでシナリオを作り、自分たちで演出し、自分たちで形にして、日本に向かって発信し始めたのだ。



Photo: Yuto SAIJO



キルギス日本語チャンネル — Kyrgyz Nihongo Channel —
<https://www.youtube.com/channel/UC6ay1J-365qQ8TFMxqd1SuA>

出版物紹介



私家版の出版物は販売しておりません。執筆者・編者による譲渡あるいは貸出にて承ります。出版物に関するお問い合わせは小社（☎088・850・0588）出版室担当まで。

葛の花Ⅱ

橋詰登志子・著／私家版
「仕様」A5判（148×210）
176頁／上製本貼函付



平成二十一年に出版した『葛の花』に続く句集。「ホトトギス」「勾玉」に掲載された五年分の作品から、六〇三句を四季ごとに編纂した。日々農を慈しみ、励む中で生まれた句ひとつひとつから、日常を細やかに見つめる感性が窺われる。洗うても流せぬ農の日焼の手（本書より）

飛鳥のお花見

く今年はお花ありましたく

例年に比べ見頃が長続きし、今年は真正正銘のお花見ができました。当日は少し風があったため、紅白歌合戦大トリの紙吹雪ながらの花吹雪も見られました。（花びらだけじゃなく小枝も降ってきたけどネ…）



2016
4.9



生きたあかし

吉中陽子・著／私家版
〔仕様〕B6判(128×182)
170頁／上製本貼函付



交通事故により一時は危篤状態になったことで「二本足で立ち歩けること、生かされていることに感謝」し、金婚式の記念として出版。今までに六冊の詩集を出版しており、本書は詩・俳句・エッセイという創作活動の集大成とも言える一冊。貼函には想い入れある着物地の柄を用いている。

昭和生まれのモッチャンです

矢野元子・著／私家版
〔仕様〕B5判(182×257)
188頁／並製本



昭和八年生まれ。都市での小学時代はまともに戦争を体験。疎開等の資料多数。後半では「労働組合の分裂」「女性」という二重差別の中で諦めることなく闘い抜いた全容が細かく記録されている。随所に著者の詩作、合唱との深い関係が散りばめられている。本書は前編で平成二年頃までの記録。

Publications introduction ● ASUKA

↓「本づくりの集い」応募票ウラ面 詳細は10ページでご確認ください

郵送される
場合、お手
数ですか切
手を記して
ください

飛鳥出版
「本づくりの集い」係

780-0945

高知市本宮町六五番地六

本づくりの集い

参加者募集のおしらせ



本をつくってみたいと思ったことはありませんか？

けれど、分からないことだらけ。何から始めればいいのか分からない、何を相談したらいいかも分からない……。

「本をつくりたい」という想いをお持ちの方に向けて、“分からない”壁を少しでも取り除き、気軽に本づくりについて言葉を交わせる場をつくりたい――

かしこまらない「本づくりの集い」はじめます。



開催日時 2016年7月1日(金) 午後2時～
(所要時間は1時間半～2時間を予定)

会 場 小社2階

募集人数 10名程度

参加費 無料

応募方法 住所、氏名、年齢、電話番号、参加人数を明記の上、当日お話をしたい内容がございましたら併せてご記入ください。電話、FAX、郵送にて受け付けます。
(下の応募票をご活用ください)

応募締切 2016年6月24日(金) [郵送は当日消印有効]



応募票

お名前 _____

年齢 _____ 才

〒

ご住所 _____

お電話番号 _____

参加人数 _____ 人

質問事項など

お預かりした個人情報は本イベントの目的以外に使用いたしません。

郵送 〒780-0945 高知市本宮町65番地6

FAX 088・850・0599

TEL 088・850・0588

催し物案内板〈4月～8月〉

香美市合併10周年記念事業

高崎元尚展 一誰もやらないことをやる一

と き 開催中～6月12日(日)

※毎週月曜休館

9:00～17:00 (入館は16:30まで)

ところ 香美市立美術館

入場料 一般 310 (150) 円・()内20名以上団体料金

長寿手帳提示150円、身体障害者手帳、障害者手帳(精神障害者、保健福祉手帳)又は療育手帳を所持する者及びこれらの者を介助するために必要な者(身体障害者等1人につき1人)は無料、高校生以下無料

高橋宣之 写真展 闇の彩り

と き 開催中～6月5日(日)

休館日 毎週月曜日(祝祭日の場合翌日)

開館時間 9:00～17:00 (最終入館 16:30)

ところ 越前町立横倉山自然の森博物館

入館料 大人 500円、高校・大学生 400円、

小・中学生 200円

各20名以上の団体 100円引き、70歳以上 250円、身障者手帳をお持ちの方は無料

第35回 高知学芸中学高等学校吹奏楽部定期演奏会

と き 5月3日(火・祝)

開場17:15/開演18:00

ところ 高知県民文化ホール (オレンジ)

入場料 500円

第27回 高知西高等学校吹奏楽部定期演奏会

と き 5月4日(水・祝)

開場17:30/開演18:00

ところ 高知県民文化ホール (オレンジ)

入場料 一般 1,000円 高校生以下 500円

★スペシャルゲスト★ サキソフォン奏者 仲田 守

春のいけばな展

と き 5月14日(土)～5月15日(日)

10:00～18:00 (15日は17:00まで)

ところ 高知市文化プラザ かるぽーと7階
第1・第2展示室

入場料 前売券 400円、当日券 500円

三曲演奏会

と き 5月22日(日)

開場13:00/開演13:30

ところ 高知県民文化ホール (グリーン)

入場料 2,000円 (中学生以下無料)

第39回 鏡野吹奏楽団定期演奏会

と き 6月4日(土)

開場17:45/開演18:30

ところ 高知県民文化ホール (オレンジ)

入場料 一般前売 1,000円 (当日 1,200円)

学生前売(小中高) 500円 (当日 700円)

第39回 全日本おかあさんコーラス

と き 四国支部高知大会 6月5日(日)

開場12:30/開演13:00

ところ 高知市文化プラザかるぽーと (大ホール)

入場料 500円

混声合唱団Pange 第13回定期演奏会

と き 6月11日(土)

開場18:00/開演18:30

ところ 高知県立美術館ホール

入場料 一般前売 1,000円 大学生以下 500円
(当日 1,300円) (当日 700円)

第31回 高知県独立書展

と き 7月12日(火)～7月17日(日)

ところ 高知市文化プラザかるぽーと 第1・第2展示室

福原云外生誕百年記念書展

と き 8月5日(金)～8月10日(水)

ところ 高新画廊

始

動、本づくりの集
い！やっこさ、

スタートラインに立てま
した。「やりたいねえ」
と言いついて早〇年!?

流れ流れて今日に至りま
した。かわら版を手にし

て下さる方の中に潜む文
筆魂をすこしくす

ぐって、お話を聞き、伴

走できるよう試行錯誤し

ていく所存です。どうぞ

ご活用くださいね。(上)

う

ちにはもうすぐ五
才になるチワワが

います。始めは犬が苦手

だった家族も今ではその

可愛さにメロメロです。

家族が帰ると尻尾を振っ

て玄関の前でお出迎え、

身体を撫でて欲しい時に

は仰向けに寝転び催促、

眠くなった人の上の膝の上

で丸くなって寝る。その

行動一つ一つに笑ったり、

癒されたり、毎日一緒に
いるのが楽しいです。
(種)

ざっがき

印刷屋さんの 「すったもんだ」

代表取締役社長 永野正将



4月に長女が中学校に入学した。生まれてから早13年、制服姿を見ると一気に女の子へと成長しているように感じる。ついこの間まで抱っこしていた娘も、今となっては握手すら嫌がり憎まれ口を叩く。小3になった次女も長女の影響なのか、一丁前の事を言うようになり時折本気で喧嘩をしてしまう始末(笑)

そんな今、家族の癒やしはもうすぐ2歳になる三女である。全員が彼女を中心に笑顔に包まれ優しい気持ちになっている！まさに天使と言っても過言ではない。三女が中学生になる時には私は53歳、2人の姉も成人し親元に居るのかどうかと考えると寂しいというか何とというか。

この家族と精一杯今を楽しみ10年後、20年後の宝にしてあげたい、そんな事を考える今日この頃。

わが家の太郎 37

取越苦勞

永野 雅子

孫たちが遊びに来ていたある日、帰省中の息子が太郎のリードを、一回りしたらすぐに帰ってくるだろうと外したという。

それを聞いた私は、太郎も歳だから今までは違ってた遠くには行かないだろうと高を括った。

一部始終を見ていた嫁曰く、「お母さん、太郎はリードが外れた途端に匍匐前進の姿勢から脱兎のごとくに走って行ったよ。とても歳とは思えんけど」とのこと。

息子もさすがに心配になったらしく、自転車で探しに行った。同じく太郎を追いかけて行った孫の小夏も帰ってこない。

今夜は皆が久しぶりに集まる日、どうしようと思っていたら、小夏が泣きながら「よそのおばちゃんに捕まえてくれた」と言ってきた。公園まで行ったところで、泣いている小夏と走りまわる太郎を見

て、買い物かごからパンを出して太郎を誘い、ご自分の靴の紐を外して捕まえてくれたらしい。

やれやれと、皆で安堵する。

後日、宮本さんと聞いたお家にお礼に伺うと、元気に吠える犬がいて、

「うちは宮本なので、犬の名前はムサシ。十五歳です」とのこと。見れば時々犬に引つ張られる様に散歩していた方だった。さすが、名前通り貫禄十分のワンちゃん。

十五歳といえば、人間なら九十歳以上。へーっ、びっくりぽん！

太郎も今年は十一歳になる。今は元気だけれど、友人から犬が老衰になって大変な思いをした話などを聞くと、もうそろそろなどと取越苦勞をしてしまう。

そんな時が来たら、今まで寂しい思いをさせてきた太郎に、せめ



ちょっとばあやったら木にも登るぞ。まだまだ現役！

て最後は寄り添ってやりたいなどと思っていた矢先、ドラマ「あさが来た」の主人公が夫の進次郎さんのために「今日限り、仕事から身を引きます」と宣言したのを見て、私にもそのセリフ、言う時がくるかなと思う今日この頃。

「ペットじゃないよ、家族だよ」そのとおり、ひたすら私の帰りを待ってくれるつれあいのなかから…。